『西南アジア研究』No. 49, 1998

『ワクト』紙上のブルハン・シャヒドの記事について

大石　真一郎

はじめに

20世紀初頭にオレンブルグで刊行されていたタタール語のジャディード系新聞『ワクト』*Vaqīt* には，ブルハン・シャヒド Burhān Shahīd と記名された11編の記事が掲載されている。ブルハンは，1949年1月10日に新疆（東トルキスタン）省政府主席に就任して間もなく，9月26日には国民党広州政府との関係を断絶するとともに中国共産党への帰順を表明し，新疆を「和平解放」に導いた人物として知られる。現在の新疆ウイグル自治区が中華人民共和国の下にあることもまた，直接には「新疆人民の代表者」ブルハンが国民党から人民政府に統治を委ねたことに由来するという見方も可能であり，新疆のみならず中国の近現代政治史において，彼が果たした役割の重要性については多言を要しないであろう。しかし，それにもかかわらず（または，それゆえにというべきか）彼に関する研究はこれまで十分にはなされておらず，特に初期の経歴には不明な点が多く残されている。

1894年10月3日にロシアのカザン近郊で生まれたブルハンは，セミパラチンスクに本社を置く「天興洋行」の社員として，1912年に初めて新疆省の省都ウルムチ（迪化）を訪れた［包爾漢 1984：1－4］。彼は，洋行勤務のかたわら，翌年からウルムチでの見聞をもとに『ワクト』への投稿を始め，その3編目以降の記事には「通信員より」という端書きが添えられるようになる。しかし，1984年に上梓されたブルハンの回想録『新疆五十年』［包爾漢 1984］には，自身が通信員であったことには全く触れられておらず，『ワクト』等ロシア・ムスリムの刊行物を利用することもまた最近まで非常に困難であったために，これらの記事の存在はほとんど知られていなかったものと思われる。

ブルハンの記事は，当時のウルムチの状況だけでなく，彼自身の活動や人的交流，思想的傾向を知る上で貴重な情報を提供するものである。また，その内容とともに注目されるのは，彼が『ワクト』の通信員として活動していたという事実である。本稿では，まずブルハンの出自と経歴に関する若干の問題を確認したうえで，『ワクト』に掲載された記事を紹介し，彼の経歴のなかで通信員としての活動が如何なる意味をもつのかを検討したい。

I　出　　自

ブルハンの経歴の概要は『新疆五十年』によって知られるが，1949年に省主席に就任する時には，これと内容を異にするものが公表されていた。1月10日付『中央日報』は，ブルハンの略歴を以下のように紹介している［原文で民国暦の年号は西暦に改め，（　）は筆者が補った］。

> ブルハンは現在52歳，原籍は新疆のアクス県，寄留籍は迪化，ロシアのカザン中学を卒業。1912年にドイツのベルリン大学政治経済学部に入り，16年に修了して帰国する。23年に馬場（馬の繁殖場）委員に任官する。25年に新疆省汽車局籌備委員に任じ，26年に該局の初代局長に任ずる。29年にベルリンで学び，調査ドイツ実業委員を兼任する。33年に阿山（アルタイ）区宣慰使と総指揮に任ずる。33年に新疆維新（正しくは裕新）土産公司総経理と設計委員会委員に任ずる。37年に外交部は駐ソ連ザイサン領事に派遣する。38年に帰国すると盛世才は七年間監禁し[1]，44年末にようやく釈放される。ついで新疆省民政庁副庁長に任ずる。45年に第一区（ウルムチ）行政督察専員に任ずる。46年に新疆省副主席に任ずる。47年に国府委員に任じ，ついで改めて総統府国策顧問と新疆学院院長に任ずる。

このうち，任官後の経歴については，若干の年代のずれはあるものの，ほぼ間違いないものと思われる。しかし，彼の原籍が新疆のアクス県であること，1912年から16年にベルリン大学に留学していたということは，明らかに事実に反する。

まず原籍について，ブルハン自身はカザン近郊のテテシュ県アクス村で生まれたと述べており［包爾漢 1984：1］，これは彼と会見したこともあるバシキール出身の東洋学者トガンの回想録からも確認される[2]。では，何故このような誤謬が生じたのか。それは，単に新疆のアクス県とカザン近郊のアクス村を混同したのではなく，省主席就任時の新疆を取り巻く政治状況に起因するものと思われる。

1944年11月7日にソ連の支援と指導を受けたウイグル人などのトルコ系ムスリムがクルジャで蜂起し，12日に東トルキスタン共和国臨時政府が樹立された。ソ連赤軍を含む共和国軍はイリ地方を占拠した後，タルバガタイ（塔城），アルタイや新疆南部の一部の都市を次々に勢力下に入れたが，第二次世界大戦後にソ連が対中国政策を転換すると，45年9月には彼らも自ら進軍を停止し，マナス河を挟んで省政府軍と対峙することになった。国民政府中央は，これにたいして軍事委員会政治部部長の張治中を派遣し，ソ連の仲介で和平交渉を行った。46年6月6日に和平協定が締結され，東トルキスタン共和国政府は解散した［王 1995：115－27, 167, 202－6, 240－6］。7月1日に改組された連合の省政府では張治中が主席に，ブルハンとイリ側のアフメトジャン Aḥmadjan Qāsim が副主席に就任した。しかし，1947年5月に張治中の後任として反ソ反共の立場を取るマスウード Mas‘ūd Ṣabri が

省主席に任命されると，6月にはソ連の標識を付けた飛行機とともにモンゴル共和国軍が，アルタイ地区に駐屯するカザフ人ウスマン 'Uthmān Bāṭūr の部隊を攻撃したとされる「北塔山事件」が起こった。さらに，マスウードの就任に抗議したイリ側の代表は8月までに全員イリに引揚げ，省政府と決裂した［Forbes 1986：206－15］。新疆の情勢が緊迫するなかで，張治中の推挙を受けたブルハンは，国府委員として中央政界での照会を経たのち，1949年1月10日に新疆省主席に就任した［包爾漢 1984：323－32］。

張治中は，ブルハンを省主席に推した理由を「ウイグル，カザフ族のなかで声望があり，態度も比較的中立的で急進，保守両派に通じ，また祖国概念を具え，かつ親ソ的であった［張 1985：541］」からと説明している。中共軍との戦いで敗北を重ね，華北の大部分を失っていた国民政府にとって，親ソ，親イリのブルハンを起用することは止むを得ないことであった［中田 1968：38］が，それがロシア出身者となれば，ことはそれだけでは済まない。当時，少なくともウルムチでは，ブルハンがロシア出身者であることはよく知られていたようである[3]。しかし，仮にこれが公になれば，すでに中国国籍を取得していたとはいえ外国出身者を省主席に就けることは異例であり，また，新疆政界におけるソ連の影響力を考えると，ロシア出身者の就任にソ連が関与していることも容易に想像されうることであった[4]。ロシア出身を公表することで予想される中央政界からの反発を未然に防ぐためには，ブルハンを新疆出身と公表する必要があったのであろう。

また，ブルハンは省主席就任とともにタタール人としてのアイデンティティを捨て，これ以降は「ウイグル族」を名乗るようになった[5]。省主席のブルハンが当時新疆の人口の7割を越えるウイグルを代表するものであると宣伝することで，彼らの好感を得るとともに，民族自治の実践を内外に印象付けようとする意図があったものと思われる。このような「新疆出身のウイグル族」という出自は，中華人民共和国が成立した後，ブルハンをそのまま新疆省人民政府主席に任命した中国共産党によっても利用された。

しかし，当然ながら，これ以前の史料は彼がカザン出身のタタール人であることを示していた。中国側から公表されるブルハンの経歴との齟齬は，1970年前後に西側で出された中国共産党員の人名録のなかでも指摘された［Boorman 1967：3；Klein 1971：5－6］。あたかも，そのような指摘に応えるかのように，回想録の冒頭でブルハンは，カザンで生まれたことは認めたものの，父方の祖先を辿ればもとは新疆のアクス出身であったこと，すなわち高祖ポラトがバイ（富豪）の搾取に反抗したために清朝軍に逐われてロシアに亡命した［包爾漢 1984：1］ことを述べ，それゆえ自身がタタールではなくウイグルであると弁明したのである。彼が根拠としている事柄の真偽を確認する術はないが，その信憑性は極めて低いと言わざるをえない。

II 『ワクト』紙の記事

一方，1912－16年のベルリン大学留学の件は，『ワクト』の記事が1913－15年にウルムチから送られていることからも，完全に否定されるものである。確かに，ブルハンが1930－33年にベルリン大学に留学していたことは回想録にも言及されている［包爾漢 1984：121－6］が，これもまた時期を誤認したというような不注意に帰すことはできない。換言すれば，ブルハンは省主席に就任するに当たり，1912－16年にベルリン大学に留学していた，または，その期間は新疆にはいなかったという虚偽の経歴を必要としたのである。恐らくは後者であり，そのちょうど前後一年ずつ短い期間と重なる『ワクト』通信員としての活動が，これと無関係であるとは考えがたい。

『ワクト』は，1906年2月21日に創刊され，ロシア10月革命後の1918年1月に停刊されるまで，ロシア・ムスリムの刊行物のなかでは，ガスプリンスキー Ismā'īl Ghaṣprinskī が創刊した『テルジュマン』*Terjümān* 紙と双璧をなすものであった［Bennigsen 1964：72］。辛亥革命以後，ロシア・ムスリムのジャーナリズムはアジア最初の民主共和制を標榜する中国の動向に関心を寄せるようになるが，ロシアと国境を接し，住民の大半がトルコ系ムスリムである新疆は特に注目されていた。『ワクト』は，ウルムチのブルハン以外にもクルジャ，タルバガタイ，カシュガルなど新疆の主要都市に通信員を置いていた。また，タタール人ジャーナリストのヌーシルヴァーン・ヤウシェフ Nūshīrvān Yaushef は1915年から17年にかけてクチャ，アクス，カシュガル，ホタンのようなタリム盆地周辺のオアシス都市を周り，『ワクト』やこれと同じ出版社から月二回出されていた雑誌『シューラー』*Shūrā* に100編ほどの記事を載せた［大石 1998：24－7］。

これらの記事は，1910年代の新疆の政治状況だけでなく，同時代史料に乏しい当地のトルコ系ムスリムの信仰，教育，経済などの社会的状況を伝えるものとして重要である。しかも，ブルハンの記事は，彼がその後の新疆のみならず中国政治史に果たした役割を考えれば，さらに注目すべきものである。以下，これを訳出紹介し，そのうえで通信員の活動が彼のその後の経歴にどのような意味を持つようになるのかを検討しよう。

記事試訳

訳文中の《　》は原文の括弧を示し，（　）と註は訳者が補った。（No. 1171, 1913/4/5）などの数字は，記事が掲載された『ワクト』の号数と掲載日を示す。なお，掲載日と訳文中の日付は露暦である。漢語音を写している語句については，ブルハンの漢語の習熟度のためだけでなく誤植もあったようであり，同定は困難であるが，可能なものについては元の漢字を示す。

① 中国[6]のドゥンガン（回族）のなかで（No. 1171, 1913/ 4 / 5）

北京から任命され，ウルムチに派遣された視察官でドゥンガン・ムスリムの Jeng-Yūng-līng によってウルムチの人々に《3月3日に》語られた演説は，漢語から地方のトルコ語に翻訳されて配られた。私はそれをタタール語に翻訳して送る。演説は次のことからなる。

中国では現在あらゆることが変化した。人々は進歩しはじめた。人々のなかに団結がなければ，その未来が恐ろしいものとなることは誰の目にも明らかである。もしも人々が一致団結するならば，あらゆることが成し遂げられるであろう。さて，その団結ということを知ってか，または他のことについて（知って）か，以前には中国の満州という族 tā'ife が一つとなって，騎兵でさえも自分たちの党派に加わり，現在ではモンゴルたちが一つとなって災いを引き起こし，羊を喰いに来た狼のように我々に対立し，我々を脅かしている。我々五族の民が皆同じ考えを持って一つになり，不和を頭から払拭し，《お前のもの，私のもの》という言葉を捨てさって互いに助けあうならば，他所の人々は我々に危害を及ぼすことはできない。さらには，我々の民のなかにも平和が行き渡るであろう。一本の生育している木の，枝は別々であっても，その根は一つの所にある。また，水はあらゆる方向に分かれて流れても，その源はたった一つの所である。そのように，我々は五族の民と呼ばれてはいるが，皆親戚兄弟のように元々の祖先は一つであり，一つの祖国，一つの家に属するものである。我々五族の民はともに相談しあってことをなさなければ，イスラーム教の聖法にも適合しないであろう。無益に獣のように対立することでは何事も成し遂げられない。我々は互いに非難しあい，敵意を抱いているが，その敵意のために我々はいつも虐げられているのだ。未来の危険から我々自身を我々自身が守るために，早めに準備し，互いに団結しあってことを行うことが必要である。水が来るならば堰を備えるように，備えることが必要である。我々ムスリムは些細なことでいがみあい，最も必要なことを失している。ドゥンガンは二つの族となり，一つは新教でもう一つは旧教と呼ばれているが，どちらも同じものである。どちらも同じイスラームの聖法に従っているのである。さて，そのドゥンガンを新教，旧教とに引き裂き，敵が彼らを導き迷わせている。さあ，その敵の言葉に耳を貸さず，我々皆が一致団結し，あらゆることについて相談し，我々自身に有益なことを見極めよう。我々が団結しなければ，他所の人々は我々を獣として扱うであろうし，また扱ってもいるのである。他所の人々が我々をもの笑いにして虐げるならば，それは我々自身のなかに団結がないからである。

② ウイグル[7]を調査する（No. 1260, 1913/ 7 / 27）

トルコ・タタールの歴史において甚だ重要な位置を占めるウイグルに関して調査するために，ペテルブルグのアジア研究委員会から中国内に派遣されたセルゲーイ・エフィーモヴィチ・マローフ Сергей Ефимович Малов は，この何日かをウルムチ市で過ごし，6月22日に chān-ṣū-ṣūdā-jāv（>gan-su su-zhou＝甘粛粛州）方面《天山[8]山麓》のウイグルのなかへ旅に出た。そこで今年の10月まで留まるつもりでいる。その後，sīn-zhāv-ḥāmī（>xin-jiang ha-mi＝新疆哈密）に来て，そこで一，二ヶ月ほどいてウルムチに帰ることになっている。その後，カシュガル方面に旅をする。セルゲーイ・エフィーモヴィチはとても快活で話好きな人であり，我々が会談したわずかなあいだに，ウ

イグルに関して自身が目にした多くのことを語った。以前，彼は1909年10月にウルムチに来て，1910年2月にṣūd-jū-ghä-niyāz-sān[9]《南方の山という語》山のウイグルが住む所に行った。そこのウイグルは二ヶ月ほどこの人と接触せず，彼の側には来なかった。この人が彼らの家に行っても迎え入れず，そこから逃げ出したということである。大変な苦労の末にようやく彼らを徐々に自分に引き寄せるようになった。彼らにお金などを与えて，ある人（の声）を蓄音機に録音するようになった。彼は話をさせた。彼らと語り合い，多くのことを質問するようになった。

セルゲーイ・エフィーモヴィチはウルムチ滞在時に，ウイグル文字で書かれた古い文書を入手した。この学識ある旅行者が多くの困難に遭いながらも，遙か昔にいなくなったウイグルを探し出し，彼らの足跡を見つけ，トルコ・タタールの歴史に貢献したことは，我々のためにも称賛と感謝に値することである。我々は彼の仕事の成功を祈る。 6月23日

③　中国でムスリムを殺す（No. 1305, 1913/ 9 / 25）

ウルムチの総督《dūdū（<dou-du＝都督，楊増新)》は，ムスリムの二人の尊敬すべき人物を逮捕して殺した。この一人はコムル市の出であり，guvāndäy（>guan-dai＝管帯）《連隊長》の地位にあった。名はTemür Khalifa（>Khalīfa）であり，まだ40歳で，とても勇敢で，人民の側にとても好意的な民族の護持者であり，真のムスリムであった。昨年，コムル知事（白文超）による人々への虐待が増えはじめたために，人々は知事にたいして戦端を開いたが，その先頭にTemür Khalifaがいた。Temür Khalifaはそのために自分の軍とともにウルムチに招かれ，また軍とともにウルムチに留っていた。ここでも甚だ無私の人であった。人々はTemür Khalifaを決して忘れず，彼を亡きものにした者たちは人々の怒りから免れない。

人々の話によれば，ウルムチ地方軍司令官のYūnän Mādāreng[10]はTemür Khalifaを滅ぼすためにコムル知事から数千の銀を受け取っていたらしい。Yūnän Mādāreng自身はムスリムであったが，ドゥンガンの血筋であり，Temür Khalifaはサルト[11]であった。そのために彼に敵対する行動をとったのである。

殺された尊敬すべきムスリムの二人目は，Muḥyī al-Dīn Īshānで，50歳であり，彼も管帯の地位にあった。彼は先にトゥルファン市から300人の軍を率いてウルムチに来た。8月16日に逮捕され，25日に殺された。彼らとともに働いた者たちのうち3人が殺された。Temür Khalifa とMuḥyī al-Dīn Īshānの亡骸はムスリムの手に渡された。イスラームの民は彼らを盛大に見送った。彼らの葬儀には人々はとても多かった。 8月25日

④　中国のウルムチ市[12]（No. 1440, 1914/ 3 / 15）

この町は西部中国の一大中心地であるばかりか，商業面でもとても高い地位を得ている。この町の五万ほどの人々の多くはキタイやドゥンガンや，トゥルファンルクとカシュガルルクのサルトであり，彼らの他にはロシア・ムスリム《タタール，サルト，カザフ》も多くいる。土着の人々の商売は北京，上海，漢口からの様々な商品や茶と，ロシアから来る織物からなっている。トゥルファンルクとカ

シュガルルクのムスリムの経済状況は低劣で，大きな仕事をする者はとても少ない。ロシア・ムスリムは数の面では多くはないが，彼らよりも大きな商会があり，商業界では重要な地位を占めている。ロシア人の商会の中でここに常置されているものは一つもない。しかし，時々来ては牛を集めていくロシア人がいる。ロシア・ムスリムはロシアから織物，鉄，砂糖，酒，小間物やそれに類する工場や工房の製品を持ってくる。ここからは羊毛，獣毛，綿花，獣皮や生畜を持ってロシアに送る。彼らは両方向の商売に仲介をして良い利益を上げている。

これらのムスリムの多くはキタイの言葉を理解する。彼らとの交際を惜しまずにする。トゥルファンルクやカシュガルルクのムスリムとも大きな仕事をする。このロシア・ムスリムの商売はウルムチだけでなく周辺地域にも支店があり，そこで大きな商取引を行っている。これらのムスリムがロシアの商品のためにここに道を開いたように，ここの商品のためにもロシアでの市場を得ることになった。ウルムチ地方は家畜を育てるのに容易であるため，ロシア・ムスリムのなかにはここで家畜を育てて，大きな仕事をした者もいる。中国政府は土地に関して彼らを干渉しない。ウルムチの総督は概ねロシア籍の人々と良い関係にある。

ウルムチにはロシア・ムスリムのモスクとマクタブ以外に，27のモスクがある。しかし，一つも整備されたマクタブはない。特にドゥンガンはモスクを建てるのにとても熱心な人々である。27のモスクのうち22はドゥンガンのものであり，残りの5つはトゥルファンルクとカシュガルルクのサルトのものである。ドゥンガンの通常の言葉は漢語であり，教えるのはアラビア語である。中国のムスリムは概ね子供を教えることに無関心な人々である。国で共和制が宣言される以前には，ウルムチに幾つかの整備されたキタイの学校があった。当時，ドゥンガンとサルトの子供たちをも強制的に教えるようになった。トゥルファンルクとカシュガルルクのムスリムの多くは子供を隠してしまったり，別の方法で子供を学ばせないようにしたという。共和制が宣言された後には，人々にたいして子供を学ばせないことは自由になった。学校も閉鎖された。ある旧派の総督は幾人かの教師を政府への反対活動のかどで逮捕し処刑した。幾人かの教師は逃げてしまった。その時から学校は開かれないままである。

トゥルファンルクやカシュガルルクのムスリムのなかには教養があり時代に通暁した人は少ない。Karīm Jamāl al-Dīnof や Yūsuf Ākhūn Sā'atchi のような若干の進歩主義者はいるが，彼らはとても少なく，人々に何ら影響を及ぼすことはできない。北京の国会に選出された者たちは人々の要求を理解する者ではなかった。このドゥンガンの目の開かれた者たちは拝火教徒 majūsī のキタイが直ぐにもムスリムを完全に飲み尽くしてしまうことを危惧している。

ロシア・ムスリムにはウルムチに1つのモスクと，時代に相応しく整備された1つのマクタブがある。ウファのアーリエ・マドラサで学習した Zīnat Allāh efendi Jigitbāyef は，数年来努力してマクタブを素晴しく整備した。1910年にウファに帰り，自分の同僚としてウファから一人の女性教師も連れてきた。女性教師 Maryam Khānīm は女子を教え，彼女らに手芸を習わせた。二人の若者は大いに努力して，ここで教育と文明を広めた。我々は富を追い求め，富を得るためにこうして遠くから来ているが，我々の同胞が暗い僻地に光を照らすために努力しているのを見るのは甚だ大きな喜び

であった。

⑤　ウイグルのなかでの学術調査（No. 1600, 1914/ 10/ 4）

夏に有名な東洋学者の一人セルゲーイ・エフィーモヴィチ・マローフ氏がウルムチに来て，ウイグルのなかへ学術調査をしに行った。彼は4ヶ月間行って帰ってきた。一回目に行った時には，ウイグルは彼から逃げていたという。今回は慣れて逃げなくなったという。マローフ氏は多くの時間をチャントゥのサルトのなかで過ごした[13]。彼は昔のウイグルから残った歴史的遺物の外に，現在のウイグルが残したものについても多くの情報を集めた。彼は70－80人程を人体測定学に従って測定してみた。以前に行った時には山間部に住むウイグルとより多く接触したが，今回は草原《オイルグ》の地に住むウイグルのなかに赴いた。写真機によって人物写真や，礼拝所や住居の様子を撮影した。写真からわかることでは，ウイグルの衣服や生活は全くモンゴルのような《まさにそのタイプの》ものである。住居はチャトル《テント》からなっている。彼らは家畜を育てて暮らしている。現在，彼らの宗教は拝火教《仏教》であり，彼らのなかにはシャーマニズムもあるようである。もともとウイグルは2つのタイプがあり，一つはサルトに，もう一つはモンゴルに似ている。マローフはサルトの傾向を有するウイグルの男性や婦女子（の声）を蓄音機で30本の蠟管に録音した。彼は哈密にいるウイグル・サルトの謎かけや民間伝承と昔のロシアの民衆文学の間にはとても近い共通性があることを話した。トゥルファンではウイグル語で書かれた二つのとても古い文書や仏教の《信仰条件》sharā'iṭ al-īmān が書かれた版書が見つけられた。ウルムチからも20種類近くの文書《裁縫屋や鋳物屋の文書》[14]を得た。

土着のムスリムの間には，ある種の習慣がある。ある人が病気になったり，気が触れたりすれば，彼を夜中に一人で家に置く。彼の傍らに一，二人が入り，家の壁の幾つかの場所に蠟燭を灯し，（部屋の）中央には天井への一本の紐を結び付ける。病人はその紐を摑んで座る。それから，このムスリムたちはそれぞれある種の ASKRBPKH（不明）に似た楽器《ドゥタール》を持ち，それを弾いて病人の周りをぐるぐると回る。彼らは思い思いに祈禱を唱える。その儀式が終わった後，鶏か羊の首を切って，その血を病人の全身に塗りたくり，祈禱者の一人が手に3本の葦を持ち，それを燃やして病人の上で何度か回す。マローフ氏はそれをある晩に自分の借家でやらせてみた。クルジャとウルムチでムスリムたちにその慈悲をもって知られる領事ディヤーコフ Дьяков 閣下もその集まりに出席された。土着の人々の間で《トゥグ》や《ピール・オユナトゥ》と言って行われているこのことを，マローフは私たちの所では《ピーリー・ゴンストワ》と呼んでいると言った。さて，彼はその《トゥグ》の全ての道具を購入して，ペトログラードの民族博物館に送った。彼自身は現在ロプ方面に行った。途中でカラシャフルに滞在して，そこで古代の遺物を発掘しようとしている。ロプで4ヶ月間留まった後に，アルトゥ・シャフルを通り，そこからアンディジャンを経てペトログラードに帰ることになっている。

⑥ 中国のムスリム（No. 1602, 1914/ 10/ 7）

西部中国の都市の一つであるウルムチには，カシュガルルクの多くのムスリム《アルトゥ・シャフルのサルト》がいる。彼らのなかにはとても大きな商売をしている者もいるが，その多くは単純労働に就いている。特にトゥルファンルクのなかで大きな商売をしている者は少ない。彼らの多くは小さな商品《雑貨》で仕事をしている。トゥルファン自体には綿花や葡萄その他の果物が多い。人々の多くもそれに従事している。トゥルファンではムスリムは綿花やその他の果物を栽培するが，その利益を彼ら自身が得ることはできない。なぜなら，彼らは綿花を初夏に種まきするやいなや，キタイやドゥンガンやサルトたちに安値で売ってお金を手にするようになるからである。秋に収穫する時には彼らの手にはわずかなお金しか入らない。多くの苦労をかけて育てた綿花の利益をキタイとドゥンガンが得る。

ウルムチのムスリムは今日まで学ぶことに何ら注意を向けなかった。学ぶことがないことはない。しかし，とても古い方法によってである。昔のロシア・ムスリムのように《信仰条件》と文体によって何年も子供たちの頭を害することも，その学ぶということとみなされている。このように学ぶことにも正しくは注意が向けられていない。このようなものでもより良く学ばせたなら役に立ったであろうが，それもない。より有力なカシュガルとトゥルファンの商人たちが奮起して整備されたマクタブを開くならば，その後には人々も加わって子供たちを託し，教育を高めあったであろうに。率先して行う者はいない。きちんと整備されたマクタブがあれば，この人々はとても有能であるので，速やかに啓発されたであろうに。ここの人々が最も必要とするまさにそのことを始め，努力して理解させようとする者はいない。理解されれば，人々は全く反対はしなかったであろうに。彼らは従順な人々である。

商人たちのなかにはキタイともロシア・ムスリムとも良い仕事を行う者がいる。

カシュガルルクの商人たちの間では妬み，甚だ皮相的な妬みが多い。そのために何ら協力することはできない。互いに妬みあい，端で罵りあい，それぞれの商売への妨げとなっている。この原因は一面では無知であるが，別の面では職種が少ないことである。皆が同じ種類の商売をするので，一つのことを一人が得ることはできない。キタイたちには次のような諺がある。 mäy mīändī, jän būrī mäshī khūy（>mai-mian-de, jian-bu-de-mai-shi-hui＝売麺的見不得売石灰）すなわち小麦粉を売る者は，白墨を売る者を見てはならない，ということである。中国のムスリムたちの嫉妬も正にそのようなものである。

去年，クチャでカシュガルルクの商人の Bālṭa Ḥājī, ʻAlīm Ḥājī, Islām Ākhūn という人たちがクチャとアクス《アルトゥ・シャフル》の町の税関を政府から 22,000 両《14,670 ルーブル》で買い取った。ムスリム自身の間からおこった嫉妬のために，彼らは多くの損害を被った。彼らは利益を得ることができないまま，ウルムチの総督に嘆願して辞任した。その嘆願で，彼らは《政府自身によってあらゆるものに一定の通関税が決められれば，私たちはそれを集めて支払います。それに応じて私たちの報酬を政府自身がお与えください》と言った。このことから，彼らが一つの価値に留まりうるだけでは満足しないことがわかる。恐らくは，以前にこの税関を管理していたキタイたちは多くの利

益を得ていたであろう。キタイが利益を得ても，ムスリムが利益を得られない理由は多くはそのようなことである。税関がキタイの手にあった時には，ムスリム商人たちは商品にどれだけの税金がかけられても支払っていた。ことがムスリムの手に移るや争い，支払わず，払ったとしても少ししか払わない。ことがムスリム自身の手に移るや，キタイに支払うことを大いに望み，（ムスリムに）支払う代わりに拒否して争うようになり，そのようにしてムスリム自身を自らだめにしているのである。

⑦　戦争とウルムチ《中国》のムスリム（No. 1637, 1914/ 11/ 21）

ウルムチにおいて領事 Алексий Алексович Дьяков 閣下とアクサカルの ʻAbd al- Khāliq Yenīkīef らのご尽力により戦争で負傷した兵士のために寄付金が集められた。まず領事閣下は自ら 50 ルーブルを，その尊敬すべきご夫人は 10 ルーブルを寄付された。その後，商館の ʻAbd al-Jabbārof 家兄弟は 100 ルーブル，商館の Ramaẓān Chānīshef は 500 ルーブル，ʻAzīz Ḥājī al-Hāmjānof は 300 ルーブル，Ẓiyā al-Dīn Muḥammad Qālīef は 200 ルーブル，Mīr Ṣāliḥ Mīr Ḥājībāyef は 200 ルーブル，ʻAbd al-Jalīl ʻAbd Allāh Bāyef は 100 ルーブル，バルという商会は 100 ルーブル，ʻAbd al-Raḥmān ʻAbd al-Luṭbīef［>Luṭfīef］は 50 ルーブル，Хорунжий Михайлов は 50 ルーブル，ʻAbd al-Khāliq Yenīkīef《アクサカル》は 25 ルーブル，Karīm Chānīshef は 25 ルーブル，Qāsimjān ʻAbd al-Rasūlof は 20 ルーブル，ʻAbd al-Qādir Badal Muḥammad Bāyef は 20 ルーブル，Manṣūrjān Nūrchībāyef は 10 ルーブル，Ibrāhīm Muḥammad Vālīef は 10 ルーブル，Ṣadīq ʻUthmānof は 10 ルーブル，Андрей Княжев は 10 ルーブル，Ḥasīn Būrnāshef は 5 ルーブル，Bek Sulṭān Vālīkhānof は 5 ルーブル，Доктор Малишев は 5 ルーブル，コサックのロシア人たちは 5 ルーブル，Ākhūn Tāsh ʻAbd al-ʻAzīzof[15] は 1 ルーブル，合計 1,811 ルーブルである。領事閣下は寄付した者たちに，祖国への愛情を示してなされた援助への感謝を述べられた。

⑧　中国の地震（No. 1667, 1914/ 12/ 31）

ウルムチで今年 4，5 回の地震があった。今のところ被害はないが，将来には大きな被害があるかもしれない。8 年前にもこのように少しずつ揺れたのちに一度激しい地震があり，大きな被害があったという。

⑨　中国のウルムチ市から（No. 1672, 1915/ 1 / 8）

ここのキタイたちについて誇りうる特質の最たるものは園芸 baqchachīlīq に注意を払っていることである。他所の町から来て，どんな仕事も得られなかったキタイは最初に園芸を始める。そのようにして園芸によってよく富む者もいる。

菜園に従事するキタイは，収穫を終えると，誰それの囲い《ロバを入れた》に入って畜糞を集めはじめる。冬中はそのように集めた後，夏になるとその畜糞を野菜が育つように土地の上にまく。土と完全に混ぜ合わせた後に，適当な野菜《ニンジン，ジャガイモ，キュウリ，タマネギ，トマト，カボチャ，ビート》の種をまき，それが芽吹くように大変注意を払い，それが育つために同じく注意を払

う。夏中はそれに従事する。栽培者たちは水をどこであれ全て自分が望むだけ使っている。つまりは，菜園の近くにある大きなアルク《灌漑用水路》から自分の菜園に水路を造って引き込み，それを望むだけ使っている。そのように使って，10平方サージェンの菜園があるキタイは1シーズンに400－500両《300ルーブル》の利益を得る。さて，このように有益なことがあっても，ここのムスリムがそれによって利益を得ることを知らないのは甚だ残念である。ムスリムがそのことを知らないために，ここでは物乞いが甚だ横行してもいる。恐らく，キタイのなかにはこのような悪しきこと，物乞いをするようなことはないほどであろう。

私たちのロシアにおいても，ムスリムの村々では菜園の仕事には相応しいほどには注意が払われていない。冬中に囲いで畜糞を集めるが，彼らはどこの菜園や新しい耕作地にもまくことを知らない。今や，このような有益なことを見ることができる時となった。私たちのところに仕事を得ることができず，ただ無力なままの人がどれほどいようとも，仕事を見つけるまでそのような仕事をするならば，彼ら自身のために大きな利益となるであろう。

⑩ 中国のムスリム（No. 1766, 1915/5/7）

中国のアルトゥ・シャフルのムスリムは教育，衛生，富の面ではとても劣った人々であるために，彼らの間では愚かで恥ずべきことが日に日に高じて，様々な伝染性の病気が蔓延している。今日では100人中60人が病気であると言われている。彼らの中に医者はいない。いるとしても，まじない師や占い師だけである。彼らは病気をまじない占うだけの詐欺師である。ここでは特に子供たちの死が多くなっている。なぜなら子供たちの養育は劣っており，様々な病気が生じているからである。そのために，ここのムスリムの人口はふさわしいほどには増えない。このムスリムたちは貧しい上に賭博に耽り，稼いだ金をそのためにつぎ込み，髭が白くなるまでそれによって生活を送ることが多い。この遊び《賭博》の最大のものはキタイたちの新年にあるもので，キタイとムスリムが一緒になって興じている。キタイは新年を3－15日間祝う。そこではキタイの最も上の者から最も下の者までが賭博に興じる。ムスリムも互いに集まり，恐る恐る興じる。全ての富を失って貧困に陥り，様々な屈辱に直面する者も多い。このムスリムたちは阿片とネシュ《大麻》に耽り，全ての生活をそれによって毒されている。中国政府は近年阿片を禁じたが，昔から常用して中毒になった人々は止めるができずに，なおもそれに毒されている。

このムスリムたちが貧しさのために自分の愛する子供をキタイに売らざるをえなくなったことも多い。先の1月に次のような事件が起こったばかりである。ある土着のムスリムがあるキタイから借金として30両《15ルーブル》の金を借りた。この金をそのムスリムは期限通りに返済できなかったため，利息が増えて30両が70両《35ルーブル》になった。30両を返済できないサルトが70両を当然ながら返すことはできなかった。債権者のキタイが厳しく詰め寄って請求すると，哀れなサルトは泣く泣く4歳の娘をキタイに70両の借金の形として引き渡した。また，あるサルトはこのキタイから15両の借金をしたが，彼も期限通りに返済できず，そのために15両に利子が増えて30両になった。キタイは彼にも詰め寄って，どこからなり手にいれて支払えと言った。サルトはどこからも手にいれ

て支払う財産がなかったために，2歳半の息子を売ることにした。キタイはサルトの子供にたいして200両を渡した。サルトは子供をキタイには売らずに，どこであれムスリムのところに売ろうとしてロシア・ムスリムの通りに連れていった。ロシア籍《タシュケント出身》のある商人はサルトを哀れんで，子供を自分のところで引き取り，サルトをその求め通りに救った。土着の人々の間では貧困のためにこのような哀れな事件が起こっている。ウルムチとその周辺は農業のためにたいへん肥沃な土地であるが，このムスリムたちはそれを利用することを知らない。ここでは土地は広く水は多い。もしも努力して農業を行うならば，彼らは貧困に遭わなかったであろうに。

⑪　中国におけるムスリムのための休日（No. 1802, 1915/ 6 / 20）

クルジャとウルムチでは今日まで店員のための休日はなかった。ムスリムたちにその慈悲をもって知られる領事 A. A. ディヤーコフ閣下はこの状況を考慮され，ここの店員たちに週に一日の休みを与えることを命じ，その日を金曜日に定められた。ここには中国の商人もおり，この日に彼らは商売をするので，ムスリム商人は場所を選んで，金曜日の集団礼拝までは商売することを許可した。集団礼拝の後に商店を閉めて従業員に休みを与えなければならないようにした。ここでは商売は多くは正午までだけであったので，このことはムスリム商人にとって困難には感じられなかった。領事閣下のこの良きことのために全てのウルムチとクルジャの店員たちは感謝した[16]。

ウルムチのロシア籍商人は互いにお金を集めて，4月18日に祭を催した。犠牲を屠ってコーランを朗読した。この日のために300ルーブルほどのお金が集められた。その全てが費やされた。これらのことを取り仕切ったのはムアッズィンの ‘Abd al-Qādir efendi Rajab Bāyef であった。皆が彼に感謝を述べて往来した。

Ⅲ　通信員の経歴

『ワクト』の通信員であることは，当時のロシア・ムスリム知識人にとっては相当な名誉として受取られるべきものであった。にもかかわらず，1915年6月20日（露暦）に掲載された記事を最後に，何故かブルハンは通信員としての活動を終えている。確かに，この頃のジャーナリズムの主な関心は，前年に始まった第一次世界大戦の戦局に向けられていたが，その後も同様に新疆各地からの記事を掲載していた『ワクト』編集局にとって，省都ウルムチに関するブルハンの記事はより必要とされていたはずである。

青年期のブルハンは，汎トルコ主義に傾倒していたといわれ，カシュガル地方で汎トルコ，汎イスラーム主義的な教育を行ったトルコ人教師アフメト・ケマル Aḥmad Kamāl が1917年にウルムチの知事官署に軟禁された際には，ロシア・ムスリムの刊行物を差し入れたり，アフメト・ケマルが執筆した雑誌『新生活』*Yengi Ḥayāt* を密かに配布するなどの協力をし，自身も雑誌『トゥーラーン』*Tūrān* を刊行した［Hamada 1990 : 40－1］。また，1922年にはウルムチとトゥルファン在住の進歩的な青年たちとともに秘密組織を結成し，その構

成員の一部は1932年にトゥルファンで勃発した反乱の主体となったともいわれる［新免 1990：9－10］。

このような思想的傾向がすでに1915年の時点でブルハンに顕著に観られるものであったならば，後に書かれた記事がロシア当局の検閲によって差止められた可能性もあろう。しかし，実際に掲載された記事を一瞥する限りでは，それをほのめかす箇所はほとんど見受けられない[17]。逆にロシア人言語学者マローフとの交際（②⑤）や領事ディヤーコフへの敬意と賛辞（⑤⑦⑪）など，他の通信員以上にロシア人への親近感が示されている。彼の本意が何処にあったのかは知る由もないが，商社員としてウルムチに来た動機は，恐らくは「我々は富を追い求め，富を得るためにこうして遠くから来ている（④）」というものであり，その彼があえて検閲に抵触するような記事を書いたとは思いがたい。

一方，ブルハンが自ら通信員を辞めたとするならば，その理由として，彼が後に省政府の官吏となる事実を挙げることはできないであろうか。ブルハン自身は，省政府で働くようになるのを省長楊増新の命令によってタルバガタイの税務調査を行った1921年以降であると述べている［包爾漢 1984：60－1］が，軟禁状態に置かれたアフメト・ケマルとの交際が可能であったことは，彼が遅くとも1917年までには省政府関係者と接触していたことを示唆するものである。仮にその接触が1915年にもあり，それを通じて官途に就こうとするならば，いわば公にロシアに情報を流すことになる通信員の活動を続けることはできなかったであろう。勿論，これも推測に過ぎず，彼が通信員を辞めた理由として断言できるものではない。しかし，任官後，トルコ諸語に加えロシア語と中国語に堪能であったため楊増新の通訳として重用され，それを足掛りに省政府の階梯を登っていったブルハンにとって，その地位が上がるにつれ，通信員としての過去の経歴は逆に不都合なものとなったことは疑いない。

現在，中国側の見解では，19世紀末から20世紀前半にかけてヨーロッパ諸国や日本から新疆を訪れた探検家らの活動は「文化侵略」と位置付けられており，特にロシアからの探検隊の「主要な目的は，軍事，政治，経済の情報を集めて，ロシア帝国のために新疆侵略の任務を押し進めることであり，事実上彼らは新疆侵略のための先遣隊であった」とされ，ブルハンが記事の中でその業績を称えているマローフのことも，「新疆で言語学の研究を口実にして情報を集めた」と断罪されている［新疆社会科学院 1985：374－7］。マローフがこのような見方をされるならば，彼と交際があっただけでなく，『ワクト』通信員として正しくロシアに情報を提供したブルハン本人もまた同様に，またはそれ以上に，非難されなければならない。これに類した見解は省主席就任時にもあったものと思われ，それゆえ，1912－16年のベルリン留学を捏造してでも，通信員としての活動は抹消されなければならなかったのであろう。

結びにかえて

省主席就任時に，ブルハンはロシア出身のタタールという出自を「新疆出身のウイグル族」と偽るとともに，『ワクト』通信員の活動をも故意に隠蔽しようとしていたものと思われる。これがブルハン本人が自らの保身のために講じた措置なのか，それとも就任に深く関与したと思われるソ連，または張治中の指示によるものであったのかは明らかではないが，いずれにせよ都合の悪い経歴は抹消しなければならなかったのであろう。そして，このことは，彼を新疆の「和平解放」の立役者とみなす現在の中国政府にとっても同様である。

ブルハンは，1955年まで新疆省人民政府主席を務め，また中国人民政治協商会議（第2，3，5，6回）の全国委員会副主席，政協新疆ウイグル自治区委員会主席，中国イスラム教協会主任，全国人民代表大会（第1，2回）の民族委員会副主任委員などの要職を歴任し，1989年8月27日に北京において95年の生涯を閉じた。その訃報を伝える8月30日付『人民日報』は，彼を「忠誠的な共産主義戦士，偉大なる愛国者，著名なる社会活動家，ウイグル族人民の傑出した代表」と称した。

ソ連では「ペレストロイカの時代，グラースノスチ（情報公開）の政策が進められ，共産党の絶大な権威がくずれはじめると，中央アジアにおいても歴史，とりわけ近現代史の見直しがはじまった［小松 1996：12］」のにたいし，残念ながら，中国での情報公開，特に現在中国政府の最大の懸案となっている少数民族問題に抵触しかねない史料の公開は，いまだ十分なものではない。しかし，ソ連崩壊後も進められているロシアや中央アジア各共和国での情報公開は，これと密接な関係を有する新疆の近現代史研究にも新たな史料を提供し，その見直しを迫っている。今後さらにブルハンに関する新史料が明かにされた時，はたして，我々は彼にどのような評価を下すことになるのであろうか。

注

1）盛世才政権では当初親ソ路線がとられていたが，新疆政界でのソ連勢力の伸張を危惧した盛世才は，1937年末に「トロツキスト」を庇護しているとしてソ連領事アプレソフの召還をスターリンに求めるとともに，ソ連から派遣されていた中国人出身のコミンテルン要員を逮捕した［王 1995：76－8］。1937年5月からザイサン領事に就任していたブルハンも，38年3月に解任されて新疆に戻るとともに逮捕された。彼は1933年にモスクワで正式に革命活動に参加していた［包爾漢 1984：263, 270］。

2）トガンは，ベルリン滞在中の1924年11月10日に，新疆省政府から印刷機器その他の物品を購入するためにベルリンに派遣されていた「タタール商人」ブルハンの訪問を受けた。その時のブルハンは「理想主義的な民族主義者」であり，「中国のイスラーム，特に東トルキスタンやその自治について考えている」ようであったが，後に中共とロシア人のために働き，「アルタイ・カザフ

の偉大なる指導者にして英雄」のウスマン・バトゥルを陥れて処刑したことを知り，トガンは彼を「大偽善者」と断罪している［Togan 1969 : 562－3］。

3） ブルハンの就任後，欠員の出た省ウイグル文化協会の会長に民族派の指導者として知られるイサ・ユースフ・アルプテキンが選出されたことにたいし，『新疆日報』はこの選挙の無効を訴える論説を掲載した。これに抗議して40人ほどの青年がブルハン宅に押しかけ，「他所の国から来て住み着いて36年の移住者が省政府主席になるのは良いのに，何千年来も祖先が暮らしてきた元々のトルキスタン人の子孫であるイサ・ベク・エフェンディがウイグル協会の会長に選ばれれば承認されない理由は何か」と詰問した［Ṭūrfānī 1983 : 331－3］。この事件はイサの回想録でも言及されている［Taşçı 1985 : 524］。

4） ソ連は，ブルハンを通じて張治中にたいし，生命と地位の保証と引き替えに西北4省の中共への無条件降伏，ならびにマスウードの更迭とブルハンの省主席就任を要求した［Taşçı 1985 : 518－9］ともいわれる。このことの真偽は定かではないが，事実，張は1949年4月に自ら国民党代表団団長として臨んだ北平での国共和平会談が決裂した後，そのまま北平に留まり中共側につくことになった［新疆社会科学院 1988 : 500］。

5） 勿論，「ウイグル」がタリム盆地周辺のトルコ系ムスリムを指す民族名称として使われるようになるのは，新疆では1934年以降のことであるが，その後もブルハンは，ウイグルではなく，タタールを自称していたと思われる。1946年6月26日付の『大公報』は，省副主席となるブルハンの民族名をタタールとしている［中国第二歴史档案館編『中華民国史史料長編』69（南京大学出版社，1993年），618］。しかし，省主席就任後の1949年1月7日の『申報』の社論「新疆的新曙光」にはブルハンがウイグルであると記されている。

6） 原文中のQiṭāyは，地域概念として使われる場合は「中国」とし，その主要民族である漢族を示す場合は「キタイ」として適宜訳し分けることにする。

7） ここでウイグルといわれているのは，現在，甘粛省粛南裕固族自治県を中心に居住しているSaligh Uyghur（裕固族）のことである。一方，現在「ウイグル（維吾爾）」と呼ばれている，タリム盆地周辺のオアシスに定住するトルコ系ムスリムのことを，ブルハンはサルト，または単にムスリムと呼んでいる。ただ，⑤の記事には「哈密にいるウイグル・サルト」という表現もあり，ブルハンは，哈密（コムル）の「サルト」についてはウイグルであるという認識を持っていたようである。ソ連では，1921年にマローフの提案で，新疆から移住してきたトルコ系ムスリムにたいして「ウイグル」の民族名称が付けられ，新疆でもブルハンらによって1934年に公式に「ウイグル」が採用されることになるが，②と⑤の記事は，二人の関係が1913年の時点にあったことを示すものとして興味深い。

8） 祁連山脈の誤りであろう。

9） ṣūd-jū は粛州，niyāz-sān は南山（nan-shan）であろう。

10） 恐らくは，Yun-nan Ma-da-ren＝雲南馬大人の音写であり，楊増新によって組織されたドゥンガン部隊（回隊）の統領で，1914年にカシュガル提督に任命された雲南出身の馬福興のことであろう。

11） 遊牧カザフはトルキスタンのトルコ系定住民（主に，現在のウズベク人）のことを侮蔑的な意

味合いを込めて「サルト」と呼んだが，この他称はロシア人やタタール人によっても用いられた。1910年代前半にトルキスタン人あるいはトルコ・ウズベクというアイデンティティを確立しようとしていたトルキスタンのジャディードは，タタール語刊行物などでの「サルト」の使用を止めるように抗議していた［小松 1998：375］。ブルハンは，現在ウイグル（維吾爾）と呼ばれている人々のこともしばしば「サルト」と呼んでおり，彼が「サルト」をどのように認識して使用したのかは検討を要する問題であるが，少なくとも彼が後に自身をウイグルであると主張することになるような意識，すなわち自身がサルトであるという意識はなかったものと思われる。

12）この記事は，*Terjümān*（No. 67, 1914/ 3 / 23）に転載されている。

13）原文は，Malof jänāblarī küpräk vaqtīn Chāntūda Ṣārtlar arasīnda ütkärgän. 位置を示す格助詞（-da）を付していていることから，ブルハンはChāntūを地名と解していたようであるが，これは現在のウイグル人を指す「纏頭（chan-tou）」の音写であろう。やや時期を下る情報ではあるが，酒泉（粛州）の東関には新疆出身の「纏頭」商人が多く住んでいたといわれている［長江 1936：236］。

14）aṣnāf（同業組合）に関するものと思われる。

15）⑦の記事に列挙されたムスリム名のほとんどはロシア籍タタールであると思われるが，Ākhūn Tāsh ʻAbd al-ʻAzīzofはカシュガル近郊のアルトゥシュ出身者である。彼は，綿花やマッチなどの工場経営や外国貿易に従事するとともに，教育活動に尽力したことで知られる［Äzizi 1990：20－2］。彼の息子サイフッディンは，東トルキスタン共和国教育部長，1947年の連合省政府で教育庁長，さらに省人民政府副主席を務め，1955年には新疆ウイグル自治区初代主席となった。

16）包爾漢 1984：12には，「1917年にロシア10月社会主義革命の影響下で，私は徳合行のカシャフとともに多くの洋行の従業員に連絡し，連名で経営者側に金曜日の休みを要求した。経営者側は私たちとともにウルムチのロシア領事館に行き訴えた。領事ディヤーコフは当時の情勢を鑑みて，私たちに譲歩せざるをえなかった。その結果，私たちは金曜日に半日を休む権利を得た」とある。これもまた，意識的に書き換えられたものであろう。

17）強いて挙げるならば，「地方のトルコ語（①）」や「トルコ・タタールの歴史（②）」であろうが，これらは『ワクト』では一般に使われていた用語である。

参考文献

Äzizi, Säypidin（1990）*Ömür Dastani (äslimä 1) : Zulum Zindanlirida.* Beyjing.

包爾漢（1984）『新疆五十年』北京，文史資料出版社.

Bennigsen, Alexandre & Chantal Lemercier-Quelquejay（1964）*La Presse et le Mouvement National chez les Musulmans de Russie avant 1920.* Paris-La Haye.

Boorman, Howard L.（ed）(1967）*Biographical Dictionary of Republican China* 1. Columbia Univ. Press.

長江（1936）『中国的西北角』天津大公報館.

Forbes, Andrew D. W. (1986) *Warlords and Muslims in Chinese Central Asia: A political history of Republican Sinkiang 1911–1949.* Cambridge Univ. Press.

Hamada, Masami (1990) La transmission du mouvement nationaliste au Turkestan oriental (Xinjiang). *CAS* 9(1), 40–41.

Klein, Donald W. & Clark, Anne B. (1971) *Biographic Dictionary of Chinese Communism 1921–1965,* Vol. 1. Harvard Univ. Press.

小松久男 (1996)『革命の中央アジア — あるジャディードの肖像 —』(中東イスラム世界 7) 東京大学出版会.

小松久男 (1998) ソ連邦の解体と中央アジア — トルキスタンをめぐって —『地域のイメージ』(地域の世界史 2) 山川出版社, 364–405.

中田吉信 (1968) 伊寧事変と新疆の民族運動『東洋学報』51(3), 1–52.

王柯 (1995)『東トルキスタン共和国研究 — 中国のイスラムと民族問題 —』東京大学出版会.

大石真一郎 (1998) ヌーシルヴァーン・ヤウシェフのトルキスタン周遊について『神戸大学史学年報』13, 20–31.

新免康 (1990) 新疆ムスリム反乱 (1931–34) と秘密組織『史学雑誌』99(12), 1–42.

Taşçi, M. Ali (1985) *Esir Doğu Türkistan İçin: İsa Yusuf Alptekin'in Mücadele Hatıralar.* İstanbul.

Togan, Zeki Velidi (1969) *Hâtıralar: Türkistan ve Diğer Müslüman Doğu Türklerinin Millî Varlık ve Kültür Mücadeleleri.* İstanbul.

Ṭūrfānī, Ḥamīd Allāh b. Muḥammad (1983) *Türkistān 1331–1337 Inqilāb Tārīkhi.* İstanbul.

新疆社会科学院歴史研究所編著 (1985)『新疆簡史』第二冊. 烏魯木斉・新疆人民出版社.

新疆社会科学院歴史研究所編著 (1988)『新疆簡史』第三冊. 烏魯木斉・新疆人民出版社.

張治中 (1985)『張治中回憶録』(原国民党軍政人物叢書) 北京, 中国文史出版社.

(神戸大学大学院文化学研究科)